

『資本論』も読み方

—— マーチン、マカロック、マルクス(1) ——

馬 場 宏 二

2003年10月31日～11月9日

全文一挙掲載にしたいところだが、何せ締切までに時間がない。冒頭三分の一ほどで一区切りとする。これはこれなりに一纏りの話になっているはずである。

予め全体の筋書きを示しておく。ヘンリー・マーチン Henry Martyn (1665～1721) という、とてつもなく先駆的な経済学者⁽¹⁾がいた。彼の名が充分知られ『国富論』(1776)に明示的に継承されていたなら、古典派経済学の形成史は、ペティ (W.Petty 1623～1687) → マーチン → スミス (A.Smith 1723～1790) → リカード (D.Ricardo 1772～1823) となったはずだ、と言える位置にある著者⁽²⁾である。だがマーチンは遂に明示的には継承されず、ペティとスミスの間の知られざる傑作たるにとどまっている⁽³⁾。

このマーチンを世に知らしむべく努力したのが、マカロック (J.S.McCulloch 1789～1864) だった。彼は二冊の学説史的著作⁽⁴⁾の中で、マーチンを激賞しただけでなく、うち一冊には、既に稀覯本だったマーチンの著書の全文を収録した。結局後世の研究者は、大抵はこのマカロックの収録によってマーチンを読むことになったのである⁽⁵⁾。

筆者の知る限り、マーチンを自らの理論形成に明示的に吸収した最初の経済学者はマルクスである。ところが彼の場合、マーチン吸収において、理解困難な捻じれを多々示していた。第一、マーチンの著書は、初版名『東インド貿易の諸考察』 Considerations upon East-India Trade, 1701であるのに、マルクスは『資本論』の中で同書を都合七回も引用するほど高く評価している⁽⁶⁾にも関わらず、引用に際しては尽く再版名『イギリスにとっての東インド貿易の諸利益』 Advantages of East-India Trade to England, 1720で記しており、初版名を知らなかったはずはないのにそちらを示したことがない。また、この無署名の著作の

著者がヘンリー・マーチンと推測されていることも、彼がペティより四十年ほど若いことも知っていたのに、その名を挙げたこともない。

一般にブルジョア経済学者はマルクスの理論ばかりかその丹念な考証も無視しており、そのため自らに必要な知識を獲得し損なうことがあるが、このマーチンについては逆に、マルクス自身が、著者名も初版名も知っていながら記さなかったために、マルクス経済学の流れにおいてさえ、マーチンは無視され続けることになってしまった。その挙げ句、マルクスの書いたもの全てを活字化するという触れ込みのMEGAにさえ、マルクス追従的な作為が入り込むことにもなった。

この継承不全を生み出した最大の原因が、マルクスのマカロック嫌い——もっと深入りすればマカロックに対するアンビヴァレント——にあると思われる。それは予想外に激しいものである。これを掴んでおかないと、経済学史上のこの不幸な歪みは解明できない。本稿の主題は、とりあえずマルクスのマカロック嫌いの様相を概観することである。

I. 『資本論』における悪口——セイとマカロック

『資本論』には随分多くの経済学者が取り上げられ、論評されている。中には、ペティに関するいくつかの評価やカンティヨン (Richard Cantillon 1680-1734) の著作に関する考証⁽⁷⁾やマルサスのスチュアート剽窃の指摘⁽⁸⁾等、後世の経済学史が素直に継承すれば有益だったであろう記述が多々ある。他方で、諸経済学者に対する、批判や論難は相当に多い。ただ一言「俗流経済学者」と切り捨てている例もあるが、時としてしつこくなる。マルサスとかシーニョアが相手だとそうなる。理論的批判という以上に悪口を浴びせ続けていることもある。印象に残るのが、セイ (Jean-Baptiste Say 1767-1832) とマカロックを相手にした場合である。

この二人が特に数多く悪罵を蒙る理由は、少し読み込むと解かる。まず、セイ・マカロックの徒といった風に、組にして罵られていることが何回かある⁽⁹⁾。マルクスは、スミスとリカードを、「偉大な経済学者」とか「古典派経済学の最良の代表者」と、何回か組にして讃えている⁽¹⁰⁾から、その裏面に当るわけである。つまり、折角の優れた説を、解説普及のためとして卑俗化した悪者達、という意味である。スミスを卑俗化したセイと、リカ

ードを卑俗化したマカロックが、単なる俗流経済学者以上に悪質だ、と言うのであろう。

だがそれだけでは済まない。両者別々に罵られていることがそれぞれ何回もある。その際の悪罵の投げ方は、マカロックの方がはるかにひどい。回数も多いし手が混んでもいる。セイは単独でやっつけられる場合には大抵「バカ」と罵られる⁽¹⁾。気楽に罵倒している感じである。ところがマカロックの場合そう単線的ではなく、単なる悪罵の他にも、皮肉、転倒、そして侮蔑と多種類がある。執拗さもただならずといった感じである。

単なる悪罵にも「お抱え医者マカロック」とか「ブルジョア経済学者たとえばジェームズ・ミル、マカロック、トレنز、シーニョア、ジョン・スチュアート・ミル」とか「生意気な白痴のまねの達人なかんずくマカロック」とか、さまざまにある⁽²⁾。皮肉となると、「かしこいバスティア、もっとかしこいマカロック」があり、「スコットランドの天才マカロック」もある⁽³⁾。

転倒としたのはもっと手が混んでいて、一度持ち上げておいて後で落とすことで一層酷くケチを付けるのである。一例はマカロック『経済学原理』中の名文の引用に始まる。「利得を求める押さえ切れない熱情、金に対する呪われた渴望はつねに資本家を規定する」。これ自身はマルクスが自ら書いたと言っても通用しそうなほど見事な表現である。ところがマルクスは、相手がマカロックとなると、これにこう付け加えて結局ケチの材料にしてしまう。「もちろんこの見解はマカロックとその同類が、理論的困難に陥ったとき、たとえば過剰生産を論ずるにさいして、同じ資本家を一個の善良な市民にしてしまうことを妨げるものではない」⁽⁴⁾、と。もっとドギツイのがある。リカードの（貿易順逆と通貨量多寡との因果関係に関する）説の先駆がバーボンだと述べ、マカロック『経済学文献分類目録』が既にそのことを指摘している、と一旦はマカロックの学識を持ち上げておきながら、実は持ち上げたのは悪口を言う切っ掛けを作るためにすぎず、この後、この『経済学文献分類目録』は「無批判」で「不誠実」だ、なぜならマカロックは通貨主義を信奉しているためにオーヴァストーンのお追従をしているからだ、と罵る⁽⁵⁾。こちらが狙いだったのである。

侮蔑とした例は二つ。いずれも『経済学文献分類目録』に関わる。一つは上記のオーヴァストーン卿（サミュエル・ロイド）への「お追従」であるが、もう一つは「フォスター、アディントン、ケント、プライス、ジェームズ・アンダソンを読んで、それらをマカロックの哀れな追従的多弁と比較せよ」⁽⁶⁾、である。フォスター等に対して「お追従」と言え

るほどホメているかどうかはいささか疑問である。そもそも文献目録に載せるのだから、何らかの意義のある著作を選んでいるわけであり、多少はホメても不思議はない。ただこの『分類目録』は「歴史的・批判的・伝記的註」の副題を付しており、後世のポール・マントウなどはこれを批判的目録だと解している⁸⁷⁾ほどだから、多少ホメたくらいでも目立つとは言えそうだが、フォスター等についての注解は、筆者に読み取れ⁸⁸⁾た限りでは、お追従と言うには当らない解説的な内容である。

オーヴァストーンに対しては計4点に2ページを費やし、重視していることは解かるが、注解の部分は客観的で簡潔な解説だから、お追従と罵る意味が殆ど解からない。これを「お追従」と言う⁸⁹⁾なら、激賞と言って良いヘンリー・マーチンについての論評を何と言うつもりだったのか？

実はマルクスは、このマカロックのマーチンに対する紹介と評価を、どういうわけか全く無視した。あろうことか、自分でもマーチンをマカロック同様スミス以上だと褒めている⁹⁰⁾にも関わらず、全く無視した。そこが本稿の中心的関心事なのである。

II. 何故マカロックに辛いのか

マルクスが何故マカロックに特に辛いのかは推測するしかない。マルクス文言学者ではないから、有無を言わせぬ語句上の証拠までは提示出来ない。しかし、当たらずと言えども遠からぬ程度の推測なら可能である。実はマカロックは、経済学者の世間では極めて輝かしい存在だった。マルクスはそのマカロックを、学問的道義半分世俗的嫉妬半分で攻撃目標にした。攻撃は殆ど衝動的な憎悪の感情を伴っていたが、それは実は幾分かは自らへ跳ね返る性質のものに他ならなかった。

我々が今日大学で学ぶ程度の経済学史には、マカロックは、せいぜい古典学派崩壊期におけるリカード説の擁護者として、名前が出てくる程度である。おそらく彼には独創的な理論的貢献はないのであろう。実際、昨今でもマカロックを特に研究する経済学者は見当たらない。セイの方がまだしも—ケインズの「セイの法則」に幻惑されてか—研究対象になっている。マルクス経済学の流れでは、なおさら問題にされなくなっている。

だから、経済学の理論史面だけで見ると、マカロックは極めて影が薄くなり、なぜマル

クスがああムキになって非難したのか意味が解からなくなる。現役の経済学者としての世俗的地位を振り返っておく必要がある。すると、マルクスのロンドン亡命時代、貧しい中を『資本論』に結晶する研究を続けていたころ、マカロックが、経済学者の世界で最高級の大家の地位にあったことに気づく。

彼は30才前で雑誌寄稿者になり主筆も勤め、1828～32年、40才前後にロンドン大学経済学教授にもなった。50才前から、長く統計局監察官を勤めてもいる²¹⁾。リカードやマルサスやJ. ミルやトゥックらが1821年に設立した、おそらく世界最初の経済学者組織である経済学クラブには、1824年から加わっており、1852年には退会しているが、1856年には、同クラブの委嘱で、原本を提供しかつ序文を書いて、二冊の経済学名作集を出版した。『経済学の起源等々に関する研究』や『経済学原理』²²⁾等の著作がある他、『国富論』の新版や『リカード著作集』の編集もしているから、経済学の文献には最も詳しい人物と見做されていたであろう。さてその二冊とは、『イギリス初期貿易論選集』と『貨幣に関する稀観重要論集』であり、いずれも会員頒布用に、前者が100部、後者が125部刷られた²³⁾。それ自身今日では稀観本である。因に前者の中にマーチンの著書が含まれ、編者序文には『経済学文献分類目録』で自ら述べたマーチンへの賛辞が、マコーレーによる賛辞とともに引用されている。現役時代のマカロックは、当時最高級の評価を得た経済学者だったと見てよからう。しかも彼は、ミル父子と並んでリカードの後継者と見做されていた。

マルクスにとってこれは二重の意味で不快な存在である。一つは理論的意味である。リカードを継承すると装いながら、マカロックはマルサスや父ミルにも指摘されるほどに論理一貫性を欠く。『剰余価値学説史』では纏めて理論的に批判している²⁴⁾が、これはイデオロギー的なブルジョア経済擁護への論難とは異なる、内在的批判である。ところがマルクスは、自ら出版した『経済学批判』や『資本論』第一巻では、悪口を並べただけで、理論内在的批判は全く書かなかった。改めて書く価値もないと思うようになっていたのかも知れない。

ここで一つ考えておくべきは、マルクスのリカードへの敬意がスミスに対するより強いことである。スミス・リカードと並べて表敬するが、スミスに対しては、ファーガソンの真似をしたとか²⁵⁾やはり無神論者だったと非難された²⁶⁾とか、いわば個人レヴェルの話題もあげつらっているのに、リカードに対してはその種的话题を全く取り上げていない。スミ

スが学者だったのにリカードは商人で大金を儲けた後政治家にまでなった。俗物として遙にやっつけ易かったろうに、一言も触れていない。これはマルクスがリカードを純粹の理論家として尊敬していた現れであろう。だからこそ、彼を卑俗化したマカロックは、スミスを卑俗化したセイ以上に許し難い存在になる。

リカード理論の真っ当な批判的継承者を自認するマルクスにとって、理論的には卑俗で折衷的なマカロックが、リカード継承者として赫々たる名声を得ていることは耐えられない屈辱だったであろう。しかもマカロックはセイ同様経済学の教授にまでなっている。一度は志して得られなかった地位である。のみならずセイと違ってマカロックは同世代人である。誇り高きマルクスとしては、自著の中で悪罵の限りを尽くすことで、自らの貧しい亡命生活を慰めるしかなかったに違いない。

Ⅲ. 『経済学文献分類目録』中のヘンリー・マーチン

マルクスの奇妙な屈折は、とりわけマカロックの『経済学文献分類目録』に関わる気配がある。そこで、同書についてももう少し立ち入っておく。

そもそもこれは、文献目録の形をとった、エリートのための経済学読書案内である²⁹。本文総計362ページ、中におよそ1000点ほどの文献を取り上げている。経済学の諸分野を20に区分し、各々を一章として、各領域の著書・論文・小冊子・時論を時代順に配列する。まず著作名を、重要な作品の場合はゴシック体で、記す。これに、読み難いほど細かい活字で、書誌学的補足や著作の要旨や理論的・歴史的意義やマカロック自身の評価等の注解を加えて紹介する。通常一点当たり半ページ以下だが、我がマーチンの著作はゴシック見出しで計3ページを越える。『国富論』の各版解説計5ページには及ばないが、おそらくこれに次いで重視した扱いである。以下、その紹介の概略を示す。

99ページに書名が初版ゴシックで、全く異なる再版名とともに掲げられる。

Considerations upon the East India Trade. 8vo. london, 1701

Republished with a new title-page, but without any other alteration, and entitled

The Advantages of the East India Trade to England Considered, wherein all the Objections & c. to that Trade are fully Answered. 8vo. london 1720.

実は初版にはラテン語の割に短い副題が、再版には執筆意図を露骨に示した英語の長い副題⁸⁸がついているのだが、どちらも省略されている。

マルクスがこの箇所を読んでいたことは、『経済学批判』の註(16)での言及からも明らかだから、『資本論』第一巻で、再版名だけで七回引用しながら初版名を全く記さなかったのは、いささかならず不自然なのである。

さて以下3ページ余に亘って注解が続く。冒頭の総括的評価を記載すると…「いささか同義反復的になるが、これは深遠で有能でもっとも能力豊かな著作である。この著者はおそらく、諸商品製造における機械利用と安価な生産方法利用の有利さを決定的に示した、そしてかかる利用が労働者にとっても社会の他の諸階級にとっても、有害でなくかえって有利であることを示した最初の人物である。彼はまた、分業の強力な作用を最も鮮やかに位置付け、スミスでさえ追い越せずかえって利を得たであろうほどの巧妙さで示した」(P. 100)。

以下、2ページ半に及ぶ要点の抜粋がある。それをさらに、趣旨を伝え得る程度に要約して示す。「東インド貿易は、利のあるイギリス製造業を破壊したり、保存したい産業の雇用を減らすのではなく、同じものを国産より少ない労働で獲得する方法である。「2人で板挽き機を使うと、使わない場合の30人分の板が挽ける。28人は無駄な雇用である。5人乗りのはしけで河川輸送をすれば、陸上馬輸送の100倍、1人当りで20倍輸送できる。技能や貿易や動力機のおかげで、1人の労働が3倍の消費財を生産し得る。技能・貿易・動力機を拒否すると、多くの人間がイギリスにとって益のない仕事に従事することになる。「もし神の思し召しでイギリスに穀物が、イスラエルにとってのマナのように与えられるなら、誰も耕す仕事はしないだろう。同じように布が与えられるなら、誰も梳毛や紡糸や織布をしないだろう。ダンチツヒがイギリスに穀物を無料で送ってくれるなら、この贈り物を断わりはすまい。同じように、東インドがイギリスに、国産すれば巨量の労働を必要とする布を無料でくれると言うのにそれを断るのは気違い沙汰である…。「我々はイギリス工業品を消費するように法的に直接か高関税でか規制されることを好んで来た。今やこの禁止の自然的帰結を見ることは容易である。「それは少しの労働で出来るのに多くの労働で整えろと言うのに従うことであり、多くの労働を無用無益にすることであり、役に立つ労働を投げ捨てることであり、我々の消費を整えるのに、少ない労働で済むのに多くを

使うことであり、便益品を最も高価に整えることであり、神の贈り物のパンや布を断ることであり、動力機や可航水路を破壊することであり、少数で出来る仕事を多数で行なうことである。これらを総括すれば、インド工業品の消費を禁止することは、法によって無駄で無益な労働を造り出すことである。「イギリスは海に囲まれている。国内で必要とするものは航海によって最少で最も容易な労働によって供給される。こうして、我々は自ら作ったのではない世界中の良いもの、香料・絹・葡萄酒・宝石を享受出来る。「技能・機械・動力機は手労働を省き、雇われている人間の賃金は下げらるべきものではないがそれでも労働費を下げる。東インド貿易も諸物を少ない労働安い価格で齎すので技能・機械・動力機の発明と同じである。もし隣人が少ない労働で作りに安く売るなら私も同様に安く売るよう勉めねばならない。東インド貿易は技能と動力機の発明を強制し、賃金を減らさぬままに諸物を少なく安い労働で作って価格を下げる手段になる。「東インド貿易はイギリス工業の職人・秩序・規則性を増し、無用無益な産業を潰し、雇われた人は単純で習得容易な他の産業に移る。「どの産業でも職種は増え個人の技巧は減り、作業時間が減り、賃下げせずに労働費と価格が下がる。布の製造は梳毛紡毛等計六つの工程に分かれ、各工程が恒常的に専門化すれば技能が上がる。「時計製造は複雑な仕事だが、時計需要が充分大きくて、各職人を各部品製造に割り当て固有の仕事を行なわせ最後に一人の組立工をおくように出来れば、各職人の作業は一人で全部行なうのに比べてずっと早く完全に出来るようになる。

以上の抜粋は、ひとまず有用だし趣旨を誤っているわけではないが、細部に粗雑な点がいくつかあることを別としても、全体にマカロックの好み勝ち過ぎている。形式的に言うとな、『東インド貿易の諸考察』は22章から成るが、直接東インド貿易を扱ったのは17章まで（後の5章は英蘭鯨漁業の比較）である。冒頭1章は論破すべき東インド貿易反対論の総括、その後が、反対論の内訳に応じて、インド製品の輸入はイギリスからの地金流出になる、低賃製品だからイギリス工業の雇用を減らす、農産物価格を圧迫して地代を減らす、との三つを一々反論して、貿易を自由にし、輸入品の競争によって分業をすすめて生産性を上げれば、反対論とは逆の結果になる、と主張するのである。

この構成は再版の副題に予示されているが、興味深いことに、実践的論争文でありながら、流通論・生産論・分配論と、宇野弘蔵『経済原論』と同じ構成になっている。因にミ

ルやマカロック等古典派は、生産論・分配論・流通論・消費論である。さてマカロックの抜粋には、流通論に当たる貨幣論や信用論の部分は全くなく、分配論に当たる地代論もない。貿易の生産性引き上げ効果と、分業・機械の発達による生産性引き上げ効果とを等置した生産論の部分は、ややくどく紹介され、マカロックの弁護論的イデオロギーを反映している。賃金率を下げるべきではないとする論理的前提こそがマーチン説の問題点だったのに、そこは全く衝いていない。また、マカロックはマーチンが比較生産費説について先駆的な議論をしていたのを事実上紹介しながら論点としては明示しなかった。彼はリカード『原理』の第七章から、父ミルを経て子ミルが名付けるに至った比較生産費説が、うまく呑み込めていなかったのかも知れない²⁹。さらに、富の概念についてもマーチンは、古典派の源流、ひょっとしたらペティさえ上回る把握を示している³⁰のに、これについては全く無視した。

原本が初版再版とも殆どなくなり³¹、理論的にもあらかた忘れられていたマーチンを発掘し、後世のために収録したのは、マカロックの大きな功績だった。だが彼のマーチン評価は、マカロックの理論的限界を反映して、いささか狭すぎた。あれだけホメるなら、他にもホメるべき貢献は多々あったのである。

マーチン説の抜粋の後、マカロックはこの著作の無名の著者がヘンリー・マーチンと推測されることを、スペクテイター紙のある記事を引き合いに出しつつ示唆している。非常に慎重な言い回しで、断定を避けているが、今日の考証ではこの推測が正しかったことになる。

IV. 続編のために

この著者名推測の部分に関わって、マルクスは『経済学批判』の註(16)で、何とも不可解な批評を記している。理論的には無視しても良いほどのことだが、マルクスのマカロックに対する屈折を知る材料としては意味がある。しかしその分析にはある程度の紙幅が要る。これは次稿に回す方が良い。それに、本稿の範囲でももう一つ問題が残っている。

『資本論』における『イギリスにとっての東インド貿易の諸利益』の評価は、基本的には『経済学文献分類目録』でマカロックが取り上げた範囲に限られていた。そのことは前

節と既稿³²を読み比べて貰えば解かる。このうち、マルクスに比較生産費説の先駆としての評価が出来なかったのは、褒められたことではないが無理もない。あれだけリカードを研究しながら、比較生産費説については全く何も書き残さなかった。解からなかったと推測する他はない³³。しかし、それ以外の、貨幣・信用論や富の概念については、マルクス自身が理論的に古典派を超えており、賃金率一定の前提が成り立つべくもないことは疾っくに承知していた。そうした論点を持ち出してマカロックのマーチン紹介を批評しても不思議ではなかった。それがないとは、マルクスのマーチン理解が結局マカロックの理解の枠内に留まっていたことではないか。とすると、マルクスはあれだけ罵言を投げつけた相手の掌の内を飛び回っていたに過ぎないことにもなる。冒頭でアンビヴァレントと述べたのはそれを含んでのことであった。だがそこはもう少し論拠が欲しい。初期マルクスのマカロックへの態度も見ておかねばなるまい。素人ながらMEGAへの言及が要ることになる。これまた次稿以後の論題である。

註

- (1) もとは法律を学んだ人であり、DNBにはエッセイストと紹介されている。著書は無署名の『東インド貿易の諸考察』ひとつらしいから、経済学者としても良からう。天川潤一郎氏は、すらりと経済学者に含めている。天川『デフォー研究』1966年未来社、248ページ
- (2) 『東インド貿易の諸考察』は、序文「読者へ」の中で、叙述は政治算術の方法に従うと、ペティの序文（岩波文庫版『政治算術』24ページ）そっくりの宣言を記している。意識的なペティ学派である。
- (3) 筆者のマーチン研究としては、『資本論』の一文献]2002年大東文化大学経済研究所、working paper, No. 22, および「ヘンリー・マーチンの経済学」2003年大東文化大学経済研究所、working paper, No.25の、二つの小冊子を見よ。「ペティとスミスの間」という位置づけは、前者の8～11ページに示した。
- (4) J.S.MacCulloch, “The Literature of Political Economy: a classified catalogue of select publications……with historical, critical, and biographical notices” London 1845 (『経済学文献分類目録』); “A select collection of early English Tracts on Commerce” London, 1856 (『イギリス初期貿易論集』).
- (5) 筆者の探索では、19世紀中葉には、ブリティッシ・ミュゼアムが再版だけ持っていたようである。マルクスが直接読んだのはこの本であろう。ゴールドスミスライブラリーには初版本と再版本があり、P.J. トーマスは1926年の著書で双方を照合しているが、いつ頃ここに揃ったかは不明である。ポール・マントウ『産業革命』は初版を正確に引用しているが、原本の所在は解からない。マカロック『経済学文献分類目録』は初版再版双方を知った書き方だが、原本の所在は解からず、『イギリス初期貿易論集』では初版の書名を間違えているから、出版時に双方が目前にあったかどうか疑わしい。その他に、マーチンに言及した著者は1970年ごろまでに十数人あるが、いずれもマカロック『イギリス初期貿易論集』の誤った書名で引いているから、原本を当たってないことは確かである。最近ではゴールドスミスライブラリーのフィルム版

は簡単に入手出来る。

- (6) 前掲馬場「『資本論』の一文献」4～6ページ参照。『資本論』第1巻では第10章から第14章までの間に計7回引かれている。特に、第12章の分業論と第13章の機械論の中に計5回引かれている。
- (7) 『資本論』第1巻第19章註(54)、『マルクス・エンゲルス全集』23, 大月書店, 722ページ。以下『資本論』の引用ページはこの大月書店版による。
- (8) 『資本論』第1巻第12章 註(51), 23—462ページ
- (9) 『資本論』第1巻第15章第1節註(10), 23—767ページ, 第2巻第19章第3節, 24—80～481ページ。
- (10) 『資本論』第1巻, 第1章第4節註(32), 23—108ページ, 第3巻第20章註(45), 25—405ページ
- (11) 『資本論』第1巻第1章第4節註(31), 23—108ページ, 第6章註(22), 23—269ページ, 同第13章第6節註(215), 23—577ページ
- (12) 『資本論』第1巻第5章第2節, 23—252ページ; 同第10章, 422ページ; 同第13章第6節註(216), 23—578ページ
- (13) 『資本論』第1巻第13章第3節b, 23—533ページ; 同第22章第4節, 23—793ページ
- (14) 『資本論』第1巻第4章第1節註(9), 23—200ページ
- (15) 『資本論』第1巻第3章第3節C註(109), 23—188ページ
- (16) 『資本論』第1巻第24章第2節註(209), 23—950ページ
- (17) ポール・マントウ、徳増・井上・遠藤訳『産業革命』41ページ
- (18) 読み得る範囲でも「お追従」ではないが、実は大東文化大学図書館の所蔵本が破損寸前なので、綴じ際まで読めないため、なおさらお追従を見出し難い。
- (19) 後に、マカロックが編集した稀観論集をオーヴァストーン卿が私費で刊行させたと言う（藤塚知義、後出『経済学クラブ』60ページ）。しかしそれは10年以上後のことである。マカロックがいくら目端が効いたとしても、それを見越してお追従をしていたとも考え難い。
- (20) 『資本論』第1巻第12章第5節註(76), 23—479ページ
- (21) ここでは、カール・マルクス、高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』、1965年大月書店、1345～1346ページの解説に依拠した。
- (22) この『経済学原理』冒頭にある定義—「経済学は交換価値を持つ諸物の生産、分配、消費を規制する諸法則の科学である」は、スチュアートの書名、スミスの記述と並んで、初期におけるPolitical Economyの概念の代表として、OEDに採用されている。
- (23) 藤塚知義『経済学クラブ』1973年、ミネルヴァ書房、60～61ページ。マカロックの世間的位置の把握が可能になったのはこの本を知ったおかげである。これを教示し、関連論点についても知見を示してくれた原伸子氏に感謝する。
- (24) 『剰余価値学説史』第3分冊第20章4『マルクスエンゲルス全集』26, 219～247ページ
- (25) マルクスが分業批判に関連して、アダム・ファーガソンを師、スミスをその弟子と扱ったことが、『哲学の貧困』以来三回はある。これは勘違いでなければ皮肉なのだが、『マルクスエンゲルス全集』は、本気でファーガソンをスミスの師と解説している。
- (26) 『資本論』第1巻中最長の、第23章第1節註(75)を、末尾まで読め。
- (27) MacCulloch, “literature of political Economy” op.cit., Preface.

- (28) Wherein all the objections to that trade, I . To the EXPORTATIONS of BULLION,for manufactures consumed in England : II . To the loss of EMPLOYMENT for our own hands : III . To the abatement of the RENTS : Are fully answer' d with a comparison of the EAST-INDIA and FISHING TRADE
- (29) 『経済学原理』にも貿易論はない。
- (30) この点は古典学派形成史として改めて分析する必要があるかも知れない。
- (31) 前掲馬場『『資本論』の一文献』4～6ページ、上掲註(5)。
- (32) 上掲『『資本論』の一文献』
- (33) 参照, 馬場「古典派の比較生産費説」大東文化大学経済研究所『経済研究』第16号(近刊)。